

## 北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究

浅川 滋男

—黒龍江省での調査を中心に—

キーワード：1) 黒龍江, 2) ツングース, 3) 朝鮮族, 4) 満州族, 5) 平地住居, 6) 竪穴住居, 7) テント,  
8) 炕, 9) オンドル, 10) 定住性

## 1. ツングースの住居研究

## 1.1 北東アジアのツングース

## (1) ツングース諸語とその担い手

広義のツングースとは、アルタイ語系ツングース諸語を話す、すべての民族を総称する。狭義にはエヴェンキ族のことである。ツングース諸語はツングース・満州諸語ともよばれ、古典的には「南方＝満州派」と「北方＝シベリア派」に大別されてきた。しかし、近年ではより精緻な分類が進み、池上二良は、

第Ⅰ群：①エヴェン語（ラムート語）、②エヴェンキ語、  
③ソロン語、④ネギダール語、

第Ⅱ群：⑤ウデヘ語、⑥オロチ語、

第Ⅲ群：⑦ナーナイ語（ゴルディ語）、⑧オルチャ語、  
⑨ウイльта語（オロッコ語）、

第Ⅳ群：⑩満州語、⑪女真語

の4群に分けている<sup>注1)</sup>。

第Ⅰ群は、中国北部からシベリアの広大な地域に拡散し、その担い手はトナカイの飼育をとまなう狩猟・漁労民である。第Ⅱ・Ⅲ群は、アムール川の本流・支流の流域、および沿海州とサハリン（樺太）に分布する。オロチ族、ナーナイ族、オルチャ族は、アムール川のサケ類やチョウザメなどを捕獲する定住漁労民で、かつては竪穴住居に住んでいた。一方、ウデヘ族はノロ、ヘラジカ、クマなどの狩猟が主生業で、漁労は副次的な活動にすぎない。かつてオロッコの愛称で知られた樺太のウイльта族は、海獣狩猟・漁労・狩猟を主生業とするが、補助的にトナカイ飼育もおこなう。

第Ⅳ群の満州語は、いうまでもなく満州族を担い手とする。満州族の祖先にあたるのが女真<sup>じょしん</sup>であり、12世紀に金朝、17世紀に清朝を建国した。歴史的にみてあきらかにツングース諸語とわかる最初の言語は女真語であり、金代の「大金得勝陀頌碑」などの碑文や鏡の銘文に女真語が残っている。満州語はかつて中国東北地方で広範に話されていたが、清朝の漢文化への同化とともに使われなくなった。現在、満州語を話す地域は、黒龍江省の一部の県と、新疆のチャブチャル・シボ族自治県に限られている。

## (2) 中国のツングース

中国で独立した「民族」として認定されている55のグループのうち、ツングース語を話す民族は満州族、シボ（錫伯）族、ホジェン（赫哲）族、オロチョン（鄂倫春）族、エヴェンキ（鄂温克）族のみである。こういう民族・言語の分類は、欧米や日本のそれとかなり異なっている。たとえば、ソロン語（第Ⅰ群③）は、内蒙古と黒龍江の省境周辺に分布するが、中国では、それらの集団もエヴェンキ族の一部とみなしている。一方、中国ではオロチョン族を独立した民族と認定しているが、上の言語分類では、エヴェンキ語（第Ⅰ群②）の一部と考えられる。

また、シボ族は満州族の地方集団とみなしうる民族で、18世紀中頃、松花江中流域および遼河流域のシボ族が、新疆のイリ（伊犁）河南部に移住した。一方、ホジェン族とはナーナイ（第Ⅲ群⑦）のことである。ナーナイ（Nanai）とは「土地の人」を意味する民族の自称で、近隣の異民族からは、ゴルディ（Goldi）とかゴリド（Gol'd）とよばれてきた。また、ホジェンというのは「下流の人」を意味し、漢籍史料にみえる「魚皮韃子」や「剃髮韃子」もホジェン族のことをさすようである。

## (3) 朝鮮族とツングース

朝鮮語は、アルタイ系の諸語や日本語と共通点が多く、「アルタイ語族説」が有力であるともいわれてきた。しかし、基礎語彙レベルでの音韻対応や借用関係が不明確であり、厳密な意味での、朝鮮語とアルタイ系諸語の親縁関係が立証されているわけではない<sup>注2)</sup>。つまり朝鮮族は、ツングースとは一線を画すべき民族ではあるが、女真に先行する渤海<sup>ほっかい</sup>、靺鞨<sup>まっかつ</sup>、高句麗<sup>こうくり</sup>などは、古代の朝鮮半島ともきわめてかかわりが深い。もっとも、現代中国の朝鮮族は、朝鮮半島からの難民にほかならない。清朝は当初、一切の異民族の東北3省入植を禁じていたが、嘉慶年間 [1796-1820] 頃から、越境する朝鮮人が増えてきた。とくに同治八年 [1869] の大飢饉によって、李氏朝鮮北部の人びとが大挙して豆満江をわたり、吉林東南部へ移住した。これより先、中国へ逃れる朝鮮族は数知れず、日韓併合時代から朝鮮民主主義人民共和国成立後も増加の一途をたどり、入植の足跡は黒龍江や遼寧にまでおよんでいる。現在、朝鮮族の総人口は約200万人という。

## 1.2 研究の目的と概要

### (1) 考古学と民族学のアプローチ

本研究は、建築学・民族学・考古学の研究者が協力して、北東アジアにおけるツングース系諸民族住居の特質と歴史の変遷を描きだそうとする試みである。ところが、ツングースの歴史そのものが、いまだあきらかになっていない。すでにのべたように、ツングース語の最古の資料は、12世紀女真の碑文や銘文であって、少なくとも言語学的にみた場合、女真以前の国家や民族については、「ツングース」という用語を控えるべき段階にある。とはいえ、渤海、靺鞨、高句麗などが、その後継者たる女真と、文化的にまったく断絶しているわけでもない。本研究では、とりあえず女真以前の北東アジア地域をもふくめ、できるだけ通時的な視点で、この地の住居をとらえるべく努力してきた。これについて、すでに浅川は、中国正史の東夷伝・北狄伝にあらわれた住居・建築関係の描写を集成し、歴史的考察を加えている<sup>注3)</sup>。

この基礎的研究をうけて、本研究は考古・民族誌の資料収集をおこないつつ、民族建築学的なフィールド・ワークにもとりこんできた。調査地は、中国でツングース系諸民族が最も集中する黒龍江省である(図1-1)。

### (2) 調査の概要

**第1次調査：1995年7月20日～29日** 浅川、大貫、黄が参加。ハルピンの黒龍江省社会科学院で打合わせの後、建三江、同江を経由して街津口へ。黒龍江(アムール川)本流の南岸で竪穴住居、平地住居、倉庫、出作り小屋を

調査した。

**第2次調査：1995年8月24日～9月21日** 浅川、村田、坂田、栗原、楊が参加。寧安市瀑布村で朝鮮族集落の集中的調査および周辺漢族・満州族住居の調査。蓮華ダム建設事前発掘調査現場で、挾妻～靺鞨の住居跡の視察。

**第3次調査：1996年7月6日～7月21日** 浅川、大貫、黄が参加。黒河市の新生郷、遼克県の新興郷と新鄂郷でオロチョン族の住居、訥河市の興旺郷でエヴェンキ族の住居を調査し、阿城市の金上京遺跡も視察した。

以上の調査で実測した家屋の総数は50軒(一覧表省略)だが、本論文では、代表例のみをとりあげる。なお、家屋番号のローマ字は、以下のイニシャルを採用した。

H=Han Chinese/漢族, P=Pupu Village/瀑布村  
T=Tungus/ツングース系諸民族 (浅川)

## 2. 考古資料よりみた黒龍江周辺の住居と集落

### 2.1 東北アジアにおける竪穴住居の出現

環日本海地域以上に寒いシベリアの伝統的な住居はテントであった。したがって、黒龍江流域をふくむ環日本海地域の竪穴住居は、たんに寒冷地適応だけでは説明できない。その出現は、定着的な居住システムの形成ともかかわるはずである。シベリアの後期旧石器時代にすでに竪穴住居が登場しているが、それと東北アジアの新石器時代以降の竪穴住居とは、今のところ連続性がみとめられない。その点で注目されるのがカムチャッカ半島のウシュキ I 遺跡<sup>注4)</sup>である。新石器時代の北東アジアにおける竪穴住居の分布からすれば北限に位置するが、そこから旧石器時代終末期の浅い竪穴住居が4棟みつまっている(図2-1)。門道をのぞく面積は、大きいものでも40m<sup>2</sup>前後であり、小さいものは20m<sup>2</sup>未満である。ただし、同一遺跡の別の平地建物との区別は明瞭でない。旧石器時代にテント状の平地住居が想定されるとすれば、その床面をわずかに鍋底状にくぼめたものから、さらに本格的な竪穴が成立するというプロセスが推定される。それがカムチャッカのみに限定されるというのは考えにくい。じっさい環日本海の別の地域でも、断片的には新石器時

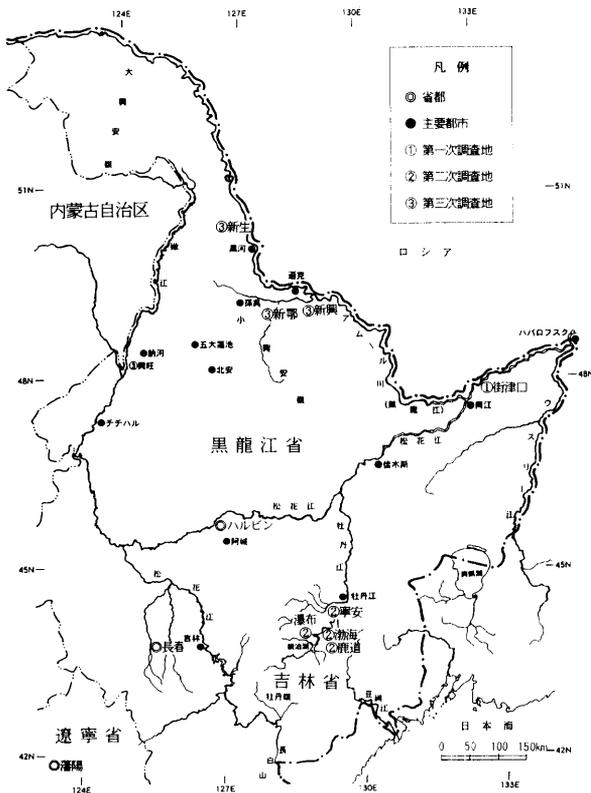


図1-1 調査地の位置

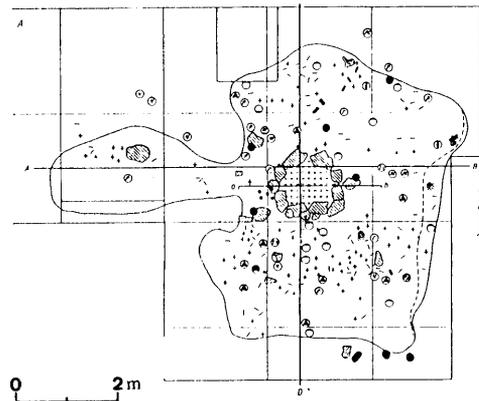


図2-1 ウシュキ I 遺跡の竪穴住居 1:150

代初頭から旧石器時代に遡る堅穴状遺構がみつかるから、新石器時代に堅穴住居の普及する別の地域でも、同様の経過をたどった可能性が高いであろう。さらに、この堅穴住居の普及が北東アジアにおける細石器文化以降の定着的な居住システムの形成と関連するものであれば、それが北から南下するとは考えにくい。

## 2.2 新石器時代

黒龍江流域で最も古い堅穴住居は、中流域のノヴォペトロフカ文化や下流域のコンドン文化の遺跡などでみつかる。黒龍江流域の堅穴住居は、少なくとも今から約6000～7000年前に遡る。ただし、それ以前の集落の遺跡は未発見なため、より古い堅穴住居がなかったといえるわけではない。また、それが上流域にはまったくなかったともいい切れないが、基本的には分布していない。この分布の境界は、生態系に規制された生業・居住システムと深い関係があると考えられ、その後もこの境界はあまり変動しない。コンドン遺跡<sup>注5)</sup>はコンドン文化期よりおくれる時期の住居もふくむため、詳細は不明だが、不整形の堅穴住居(図2-2左)が主体で、ノヴォペトロフカ文化でも方形である。また、同時存在した住居を確定することは困難だが、15～20棟程度の堅穴が蜂の巣状の配置を示す遺跡が多い。

堅穴住居の構造は、壁沿いに柱穴が密にめぐるのが主流をしめる。面積は、コンドン遺跡では30～40m<sup>2</sup>の小型のものがあるほか、60m<sup>2</sup>前後の中型のもの、100m<sup>2</sup>前後の大型のものもある。確実に時期の異なる遺構が出土しており、あまり意味をなさないかもしれないが、大・中・小型に分かれる点には注意すべきで、社会集団の分節構造を反映した可能性がある。ただし、先述した旧石器時代ウシュキⅠでも、すでに大・小の分節化を看取できる。一方、ノヴォペトロフカⅡ遺跡ではすべて面積30～40m<sup>2</sup>の小型住居であり、規模は比較的均一である。

ところで、大・中・小という規模の分化は、黄河流域の仰韶文化でもみとめられるが、小型は20m<sup>2</sup>未満が一般

的だから、黒龍江流域のほうが、全体的に規模が大きい。後半期の下流域では、コンドン遺跡のヴォズネソフカ文化に属する円形の堅穴住居(図2-2右)がある。中流域では、後半期まで下流なのか判然としないが、ノヴォペトロフカ文化に後続するオシノ湖文化でも、円形の堅穴住居がみつかる。また、黄河流域の堅穴には一般的に門道があるのに対して、黒龍江流域新石器時代の堅穴には門道がない。これについては、より寒冷な積雪地域での越冬居住とのかかわりが考えられよう。

## 2.3 紀元前2千年紀～1千年紀

黒龍江流域の新石器時代に続く段階の資料は、時間的にかなり離れ、紀元前1千年紀中葉以降になる。この時期、すなわちウリル文化では、住居が大型化する。面積が200m<sup>2</sup>を超える大型のものが出現し、50～80m<sup>2</sup>前後の住居が最も多くなる。そして長方形化する傾向がみとめられる(図2-3)。この長方形化は、朝鮮半島から日本海沿岸で紀元前2千年頃からはじまる動きに連動したものであろう。黒龍江流域では、柱穴列の規則性が明確ではない。豆満江流域をふくむ日本海沿岸では、長軸方向に棟持柱が2列ならぶ平面、朝鮮半島西部では棟持柱中央1列平面が基本のようである。都出比呂志のいう「求心構造から対称構造への転換」とみてよいかもしれない<sup>注6)</sup>。床面積の大小は必ずしも居住成員数と関連するわけではないが、1棟の住居あたりの居住構成が変化し、共住化する傾向があったのかもしれない。と同時に、一つの遺跡を構成する堅穴住居の数も新石器時代より増加しており、同時存在数は不明ながら、集落自体が拡大しているようである。その背景として、農耕および家畜の導入があろう。

リブノ湖遺跡<sup>注7)</sup>では、門道がついた堅穴(図2-3)がみつかる。黒龍江流域で、堅穴住居構造として出入口がはっきりわかるのは、この頃からである。

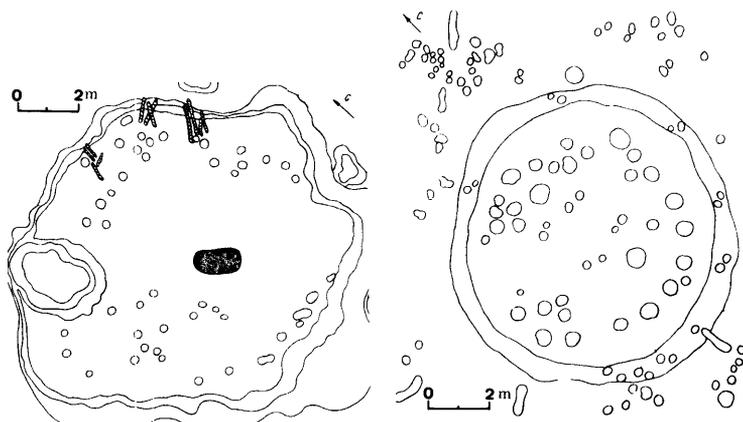


図2-2 コンドン遺跡の堅穴住居 1:250

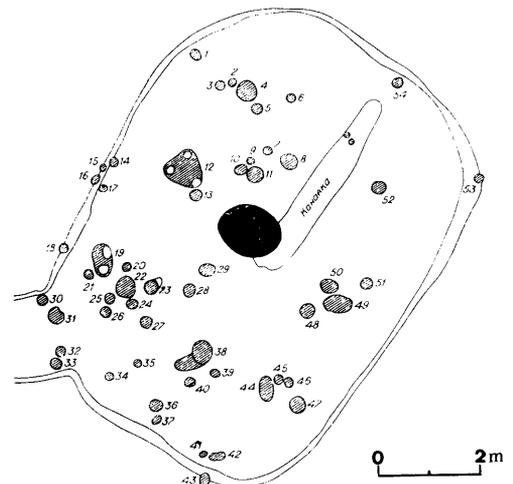


図2-3 リブノ湖遺跡の堅穴住居 1:150

## 2.4 紀元前後

つづく紀元前後のポリツェ文化では、再び平面が方形化する。規模はおおよそ大型110m<sup>2</sup>、中型80m<sup>2</sup>、小型40m<sup>2</sup>以下に分かれ、新石器時代のコンドン遺跡と似た様相を示し、再び小型化するようになる。一方、ひとつの遺跡を構成する堅穴の数は30~40棟と増えていくようである。この頃、東北アジアの暖房装置として代表的な炕の祖形態が出現し、それは甌をもなう竈とともに、日本海沿岸まで急速にひろがっていった。その背景には、鉄器の普及ともなう生産力の発展があった。

## 2.5 勿吉・靺鞨から女真へ

つぎに黒龍江流域では、史書に「勿吉」あるいは「靺鞨」とよばれる民族が登場する。これに相当する考古学文化は、中国では同仁1期・2期文化であり、ロシアでは直接「靺鞨文化」と呼ばれる。城塞集落が黒龍江流域にも普及するようになる。ミハイロフカ遺跡<sup>(注8)</sup>は、周囲を土塁と壕でかこまれた1ha規模の集落で、内外に300以上の方形の堅穴住居がみられ(図2-4)、魏書にいう「築城穴居」と合致する。柱穴配置は回字状で、旧・新唐書によれば屋根は土葺であった。

この遺跡の堅穴にもやはり大小があるが、最も大型のもので40m<sup>2</sup>前後であり、さらに小型化しているようである。また、住居の壁の一方に突出部があり、これを出入口ではなく、貯蔵施設とみる見解が一般的であるが、天井出入口との使い分けを考慮しても、突出部は出入口の可能性を検討するべきであろう。

祖形炕をもなう堅穴住居から平地住居への移行は、沿海州では、鉄器が普及し生産力の向上した渤海時代後期になって生じる。また、祖形炕が現代の炕の形式に発展するのは、渤海時代後期のものである<sup>(注9)</sup>(図2-5)。その炕付き平地住居が黒龍江中流域に普及するのは、11世紀以降のようだが、このような平地住居への移行が一斉に進行するわけではない。それは、今日まで堅穴住居が一部に残ることからもあきらかであろう。

以上みてきたように、堅穴住居は、定着的な生業形態をもった人びとの防寒用住居として、北東アジアでは新石器時代以降に普及した。その後、生産力の発展や暖房

装置の普及とも連動して、南から徐々に平地住居への移行がはじまるが、それは斉一的に進行したわけではない。また、堅穴住居以外の住居が存在したことは、民族誌にみえる夏の仮小屋や老山頭遺跡<sup>(注10)</sup>のテント状遺構などからみてもあきらかだから、季節による住み替えや移動の問題も忘れてはならないであろう。

大型住居の性格としては公共的な場所などの可能性もあるが、<sup>(注10)</sup> 挹婁や靺鞨では村ごとに首長あるいは大人がいたと史書に記されており、それとの関係が注目される。(大貫)

## 3. 黒龍江少数民族住居の調査

### 3.1 ツングース系諸民族の住居

#### (1) 満州族系の住まい

中国の東北3省は清王朝の故郷であり、かつては女真・満州族系の民族が支配していた。清朝は当初、東北地方への異民族の入植を厳禁していたが、しだいに王朝そのものが著しく漢化し、同時に万里長城を越えた漢族の北方入植も進んでいった。今では、東北地方の人口の大半を漢族が占める。しかし、東北地方の文化の底流には、女真・満州族の血が脈々と流れている。おそらく、住居形式はその血をうけつぐ代表的な物質文化の一つであろう。東北地方では、土着の満州族住居が、入植してきた漢族の住居形式を変質させており、その文化波及は他のツングース系諸民族にもおよんでいる。そこで、ここでは、これらの民族が共有する平地式建物を「満州族系の住まい」とよんで一括し、以下に報告する。

**満州族住居T04** 寧安市江東郷寧山村は100戸あまりの集落で、数戸の満州族が漢族に混じって生活している。**T04**(図3-1)は草葺きの住居である。現在の家主は60年ほど前からこの村に住みついた。70代の老夫婦を中心に、息子2人と妻子をふくむ9人住まいである。

南向きの主屋は、敷地の中央に建つ。約25年前の建築で、一部に赤れんがを併用した日干しれんが造である。切妻造の屋根は、軒が腐りやすいのでセメント瓦を一部に用いているが、もとは全面が「羊草」葺きで、すでに30年以上経過しているという。

平面は、典型的な3列型である。すなわち、入口とな

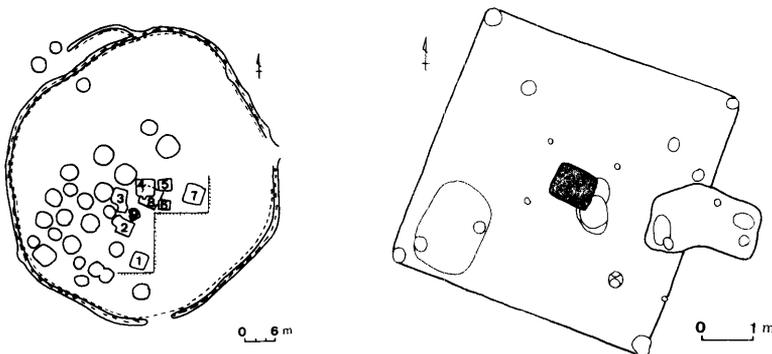


図2-4 ミハイロフカ城塞 1:1500 (左)と1号堅穴住居 1:150 (右)

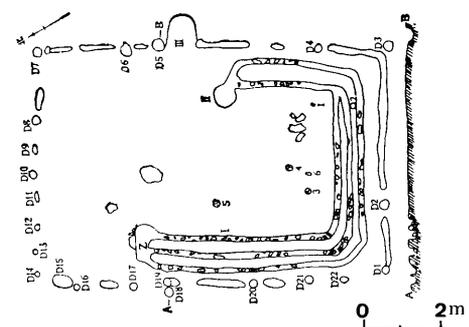


図2-5 海林河口遺跡の平地住居 1:200

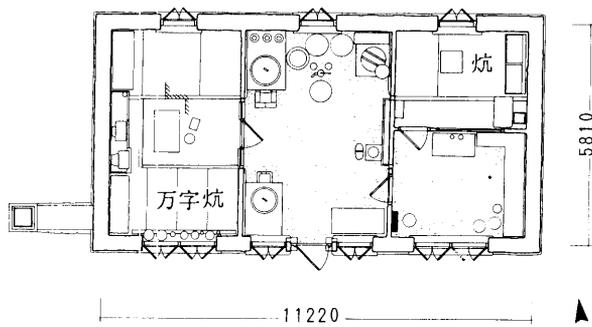


図3-1 満州族住居T04 主屋平面図 1:200

る中央間に間仕切り壁に密着して竈を設け、両脇間の炕や壁暖房施設「炉子」に煙を供給する。中央間の北壁面にはかつて窓をあけていたが、寒いのでふさいだという。西の脇間にはいわゆる「万字炕」を設ける。三方をコの字にかこまれた脇間中央の土間に、方形のテーブル「地棹」をおく。老人は西側（つまり奥）の炕に腰掛け、それ以外の者は、南北の炕の縁や椅子にすわって食事をする。就寝の場合は北側の炕が上位で、「老人は炕の頭にいる」といい、焚口に近いほうに寝る。

東の脇間は南北2室に分かれる。南の部屋は土間の前室で物置と化し、特別な機能はみとめられない。北の部屋には炕を設ける。間仕切り壁中央の壁暖房施設は、双方の室内を暖め、北東の炕に接続して排煙する。

**漢族住居H01** 寧安市街に近い江南郷張家村は、郊外住宅地といった趣きがある。住民は90%が漢族で、残り10%が満洲族である。H01（図3-2）の主屋は木造・日干しれんが壁・草葺・切妻造で、50~60年前に建てられた。もとは典型的な3列型の平面で、かつて東西の2室には、いずれも万字炕を設けていた。西脇間は結婚にともなう17年前、東脇間は10年以上前に改造した。西脇間は唯一の居室部分で、南北に2分割し、南の炕付きの部屋を夫婦の寝室とする。北の部屋にも炕があり、兄弟の寝室とする。なお、南北2室の間仕切り壁は「火牆」、すなわち壁暖房施設とする。

中央間には竈が一つしかない。西南側の部屋の炕に煙を送るための竈である。調理は電熱器などで補っている。土間には方形の貯蔵穴を掘り、水道もある。東の脇間は、

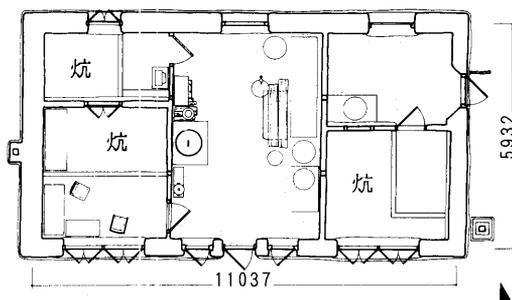


図3-2 漢族住居H01 主屋平面図 1:200

現在使われていないが、17年前に改造した炕は形をとどめている。万字炕を改造し、中央間との出入口をふさいで2室に間仕切りした。北側の部屋を土間として竈を設け、南側の部屋には炕を設けている。（坂田）

**ナーナイ族住居T01** 黒龍江省同江市郊外の街津口という村で、ナーナイの平地住居を調査した。満州国時代、アムール河岸域に分散居住していたナーナイの漁労民を関東軍が強制集住させ、街津口という村をつくった。屋敷地はグリッド状の道路にそって整然とならぶ。敷地は木柵で囲いこみ、その入口に鳥居形の門をつくる。内部に主屋や倉庫が配されている。主屋は、やはり満洲族系の平地式建物である。

調査したT01は、敷地が道路に北面しており、その西端に簡素な開戸の門を設ける（図3-3a）。主屋は南向きなので、門からは大まわりしなければならない。西側隣家との境には薪を積みあげ、区画施設の代用とする。主屋は大壁構造の平屋建で、外壁の厚さは50cmもあるが、背面ではさらに突っかい棒のように傾いた柱を3ヶ所にたてる。屋根は切妻造で、葺材には茅に似たオロフカ<sup>注11)</sup>という草を用いる。主屋の内部は2列に分かれ、東側は前室を厨房、後室を物置とする。西側は1室空間で、南側に炕を設け、北側には家具をおく。炕に煙を供給する竈は、東側前室の間仕切り壁に密着して築かれる。排煙用の煙突は、炕上の屋内西南隅にたてる。

主屋の東側には、2棟の累木式倉庫<sup>タグトン</sup>を設ける（図3-3b）。ナーナイの高床倉庫には多種あり<sup>注12)</sup>、累木式構法のものもふくまれるが、街津口の場合、地面に接するほど低い揚床形式とするところに特徴がある。もともと、間取りによると、かつては最低50cmの高さに床を張っていたとのことで、現在の地倉形式はその簡略形であるという。小屋は東立ち。その棟東を左右から斜材で支えている。屋根はオロフカ草の切妻造とする。なお、この家に居住するのは、67歳の老人男性1人であった。

**オロチョン族住居T06** オロチョン民族郷新生村は、黒河市の北西約60kmのところにある。新生村は1953年に誕生した。この年、黒龍江省人民政府は6,000万元の補助金を準備し、オロチョン族の定住化政策を実施した。呼瑪県・愛輝県・遜克県で、計69棟305室の家屋を新築し、

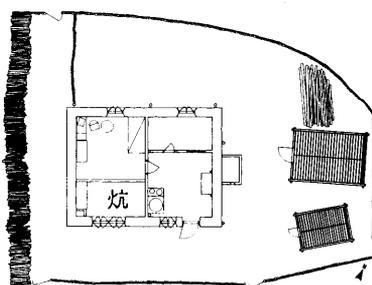


図3-3a ナーナイ族住居T01 全体平面図 1:400

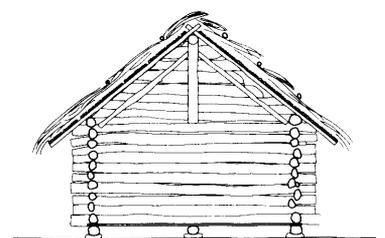


図3-3b T01累木式倉庫 断面図 1:100

いくつかの拠点集落に狩猟民を移住させたのである。新生村もその一つであり、以後、定住農耕化が進められてきた。村の総人口は1,046人(315戸)で、オロチョン族はそのうち161人のみだが、かれらは、今なお小興安嶺でノロヤハンダハンの狩猟に精をだしている。

新生村には、漢族の大工が1953年に建てた住居がいくつか残っている。いずれもログハウス形式の壁体を土で塗りこめた建物で、屋根は板葺・切妻造とする。漢族大工の作品とはいえ、漢族住宅に特有な空間の対称性はみとめられない。内部空間は2列に分かれ、その間仕切り壁に接して、入口側に竈、居室側に炕を配する。実測したT06(図3-4)では、居室がさらに南北に分割され、いずれの部屋にも炕を設ける。また、炕と炕のあいだの間仕切り壁を「火牆」とする。

**エヴェンキ族住居T10** 内蒙古との省境にちかい訥河市の興旺郷占仁村は、エヴェンキ族の村である。ただし、村民は自分たちを「索倫」とよんでおり、池上の言語分類にいうソロン語(第I群③)の担い手と思われる。興旺郷全体の人口は12,720人で、そのうち462人(142戸)がエヴェンキ族。調査した占仁村は、前村と後村に分かれ、T09が後村、T10が前村の住居である。この村の建物は、前述したオロチョンの住居よりも総じて古く、間取りによればT09は1930年代、T10は150年ほど前の建築という。ここではT10をとりあげておく(図3-5)。

T10の敷地は南側の道路に面し、中央の門から20mほど畑のあいだの通路をぬけて、主屋の前庭に至る。主屋は切妻造・平屋建で、屋根の葺材には下地に厚い土を塗り、その上に草を貼りつけている。正面の外壁には赤れんがを貼るが、これは1986年の改装である。主屋の東脇には、カマボコ土葺屋根・平屋の物置が付属する。

主屋の平面は3列型で、左右対称の漢族住宅にちかい間取りといえよう。この場合、両側の部屋は炕付きの居室だが、中央間は漢式の「庁・堂」系広間ではなく、左右の間仕切り壁に3つの竈が密着した厨房的空間となる。また、居室の炕には、あきらかな造り替えの痕跡がみとめられる。T10では、左右の居室いずれもが、かつては「万字炕」の形式をとっていた。万字炕では、奥にあたる妻壁側が上座とされ、その壁面上部にはマルと呼ばれる神棚をおいた。占仁村では、万字炕は減ったが、妻壁内側にマルを残す家が少なくない。

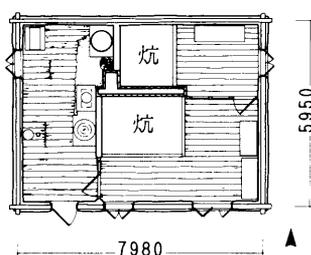


図3-4 オロチョン族住居T06  
主屋平面図 1:250

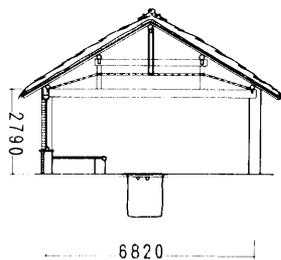


図3-5a エヴェンキ族住居T10  
主屋平面図 1:250

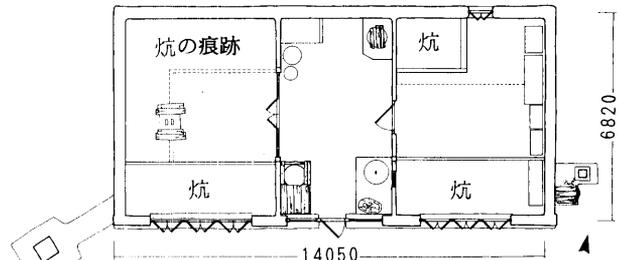


図3-5b エヴェンキ族住居T10  
主屋断面図 1:250

T10は150年ほど前にエヴェンキ族が建てた住居だが、その後、売買が繰り返され、現在の家主(漢族)は1978年にこの家を購入した。夫婦と娘2人の4人住まいで、日常の起居は、中央間と東の居室で足りている。西の居室はたんなる物置と化しており、万字炕を撤去した場所に大きな芋の貯蔵穴を設けている。小屋組は2重梁式の素朴な架構で、棟木から板状の材を吊り下げ、天井組子を支えている。

## (2) 堅穴住居「地窖子」

同江市の街津口では、アムール川南岸でナーナイ族の堅穴住居を2棟発見した。ナーナイの堅穴住居は、この地では「地窖子」と呼ばれる。

**ナーナイ族住居T02** 調査時を遡る2年前に廃屋となった堅穴住居(図3-6)。おもての妻のところだけ草を葺いているが、それ以外はすべて土で覆われる。屋根土はとくに締まっているわけでもなく、黒土をのせているだけで、その上は草ぼうぼう。裏側からみると、ただマウンド上に草が生えているだけで、とても住まいにはみえない。塚のようだという、靺鞨や馬韓の土室についての東夷伝の記載を髣髴とさせる風景が、そこに展開している。

中に入ってみると、赤れんがが積みの炕・竈・煙突は壊れはじめていた。内部は逆台形状の平面をしており、奥半分に炕をおく。炕の東北隅に煙突の付根、東南隅に竈の痕跡が残る。小屋組は棟持柱式で、棟木と周堤上の桁のあいだに多数の垂木をわたす。垂木は径5~8cmの柳の枝で、それを5~10cmのピッチでずらっとならべる。垂木を密に配し、その上に下地のムシロを敷いてから、屋根に土をのせている。興味深いのは、一般的に土葺きの場合、屋根勾配は緩いはずなのに、T02・T03ではいずれも垂木勾配が45度近くあり、さらに垂木がわずかではあるが内側に湾曲していたことである。

**ナーナイ族住居T03** こちらは2年前に新築されたばかりの堅穴住居(図3-7)。50歳の女性(ナーナイ族)が47歳の夫(漢族)とともに通年居住する。居住部分は平面が3.3×3.9mで、地面から約80cm穴を掘りこみ、そこから丸太を3~4本校倉風に積みあげて壁体とする。内部は奥の半分に炕を設け、その手前に2本の棟持柱をたてる。棟木は屋内2本の棟持柱と、入口の両脇の柱とのあいだにわたされる。この2本棟木システムにより、屋

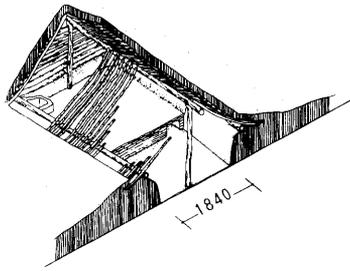


図3-6 ナーナイ族竪穴住居 T02 1:約200

頂部にはフラットな面ができあがる。架構はやや複雑で、屋根の正面は切妻だが、背面は寄棟風になっている。この背面側寄棟の屋根部分に窓を設けている。四角い板枠を組み、ビニールで覆って採光をはかっている。垂木は側面では棟木～校木間、背面では隅木～校木間にわたす。垂木の直径やピッチはT02と変わらない。下地にはまず枯草を敷き詰め、それをビニールで防水してから、厚さ15cmほどの土を葺く。居住部分の脇に貯蔵穴が付属し、竪穴が2段掘りになる点も、この住居の大きな特徴である。貯蔵穴は平面が2.0×1.4m、居住部分の床面から40cm掘りさげている。ここには漬物を納めていた。

(3) テント住居「仙人柱」

**オロチョン族の夏のテントT05** オロチョン民族郷新生村の人びとに、狩猟時に仮住まいとなるテントを作っていた（図3-8）。オロチョン語でテントはアガという。漢語では「仙人柱」と表現される。「仙人柱」こそが、定住化する以前のオロチョン本来の住居である。ここで作ったのは夏用のテントで、場所は村から2kmほど離れた東山（小興安嶺北部）の白樺林の中。まず白樺の樹を伐る。長さは4mほどで、先端の枝をY字状に残す。この材を10本用意する。そのうち径の太い（底径約6.5cm）の材を3本選び、この3本で三脚構造アチャをつくる。先端のY字状の股木をからめあうので、力のバランスがとれて、アチャは十分安定感のある構造体となる。あとは残りの7本を円弧上にほぼ均等にならべる。ただし、入口部分は間隔をややひろくとる。こうして直径3.15m、高さ3.66mの円錐形テントの骨組ができあがる。これに2枚の綿布を巻きつければ、テントが完成する。布の高

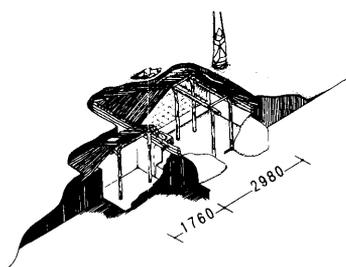


図3-7 ナーナイ族竪穴住居 T03 1:約200

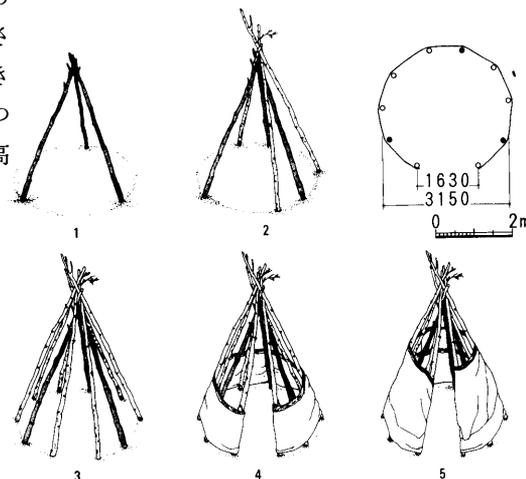


図3-8 オロチョン族夏のテント T05 1:200

さは約2m。雨の日は、さらに1mほど高くして、煙抜き部分の部分を小さくする。もっとも夏の晴れの日には、屋外に炉を設けることが多い。

ところで、本来夏用テントを覆うのは、白樺の樹皮で編んだマットであった。きくところによると、樹皮マットをつかう場合、垂木の間隔を短くする必要があるので、ひとつのテントに18本の垂木を用いたという。

**オロチョン族の冬のテントT07** 遜克県の新鄂村では、冬用テントの製作をお願いした（図3-9）。場所は、沾河の河岸で近くに柳の樹林がある。冬のテントは夏のそれよりも、ひとまわり小さい。三脚構造アチャとなる3本の柳の木は、伐りとられた材の長さが約3.15m、底径約6cm。その他の7本はさらに小さく、長さが3m弱、径も4cm弱で、完成した円錐テントは平面の径が約3.3m、高さ2.4mである。作り方は夏用テントとまったく同じ。綿布は3.45×2.78mのものを、やはり2枚巻きつけた。本来は、ノロの毛皮で覆うという。

3.2 瀑布村における朝鮮族住居・集落の調査

(1) 鏡泊湖と朝鮮族集落

吉林省の牡丹嶺に水源を発する牡丹江は、いちど溶岩台地の谷間にせきとめられ、そこから再び北流して松花江に合流する。その溶岩台地の谷間にできた湖は、水面が鏡のように美しいので、「鏡泊湖」とよばれる。この湖名は満州語のビルトン（鏡）を漢訳したものという。

鏡泊湖の周辺に住む人びとは、大多数が朝鮮族である。調査したのは、「吊水楼」という瀑布の落水をうける溪谷に営まれた村落で、その名も瀑布村という。行政的には寧安市に属する。瀑布村は、二つの屯田村、江欣子と二道村からはじまった。朝鮮半島の出身地はさまざまだが、ある老人は、1920年代に忠清北道提川郡白雲面徳洞里からやってきたと語った。かれらの最初の移民先は、吉林省境により近い鹿道という村であった。文化大革命直前の60年代前半になって、寧安政府は、鏡泊湖方面の開拓を奨励し、鹿道村から瀑布村への移住が進められた。70年代にはいると、牡丹江の水力発電化事業がはじまり、村内3ヶ所に発電所が建設された。

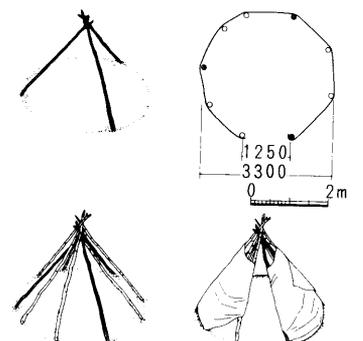


図3-9 オロチョン族冬のテント T07 1:200

しかし、かえって灌漑用水の不足をまねき、瀑布村から鹿道村へ逆もどりする一家も増え、人口は減っていったという。近年は、鏡泊湖の開放にともなう観光業の発展により、台地上に民宿街が形成され、村は再び活気を取りもどしつつある。

今回は旧二道村の全戸悉皆調査を中心に、江欣子でもオンドル造替えや屋根葺増しについて、記録をとった。

## (2) 二道村の集落構成

瀑布村の住民はほとんどが朝鮮族だが、朝鮮族と結婚した漢族もいる。人口は民宿街もふくめると500名を超え、旧二道村だけでも100名以上を数える。人口の流動化は激しく、出稼ぎにでるもの、親戚をたよって移住してきたもの、隠居にきたものまでいる。二つの農村集落から台地の民宿街への移住が頻繁におこなわれ、民宿街では、小さなホテルまで建っている。一方、農村地区では、空家が増加し、人口は減少の一途をたどっている。

旧二道村の集落は、牡丹江の支流が溶岩台地をえぐった渓谷の南東側斜面と支流の両岸にわたって形成されている(図3-10)。斜面は地皮が薄く、溶岩があちこちに露出する。この一帯に33軒の住居(P01~P33)と材木小屋(P34)1棟、機械小屋(P35)1棟が、一見ばらばらに配置されている。しかし、集落の中央を南西から北東へ流れる小川の両岸で、家屋の配列は異なった規則性を示す。南東側では、東西棟を主屋とする屋敷が整然とならぶ一帯が中心にあり、計画的な建物配置をみせるのに対し、北西側では等高線に即した自然発生集落風の屋敷配列が認められる。なお、集落の東を限るのはダムであり、

北端にはれんが造の水力発電所も建設されている。

## (3) 二道村の朝鮮族住居

**屋敷の構成** 屋敷地の中心部に、主屋・倉(図3-14)・家畜舎・便所などの建物を設け、その周辺に畑を配して木柵デザーや石垣で敷地を画する。屋敷の入口となる鳥居状の門デムンをもつ家ともない家がある。屋敷内の建物配置に明快な法則性はない。ほとんどの家の庭マダンは、主屋の前庭であり、中庭となる例は4例にすぎない。マダンには外竈ダンカマが設けられる。現在は家畜飼料の煮込み専用に使われているが、かつては夏にオンドルを使わないときの炊事施設であった。

**主屋の建築構造** 二道村には3棟だけ石造建物があるが、そのほかの主屋は木造大壁構造である(図3-11)。木舞に相当する材は太く、縦材が柱筋にならび、側面に横材を張りつけ、縄を巻きつけて土を塗り大壁とする。壁面全体の厚さは20~25cmだが、地面に近いほうがより厚い。屋根には草を葺く。寄棟造と切妻造の両方があるが、片面寄棟+片面切妻の例もある。屋根材は蓬スッが最良で、葦ガールも使うが、屋根の葺増しを観察した家ではかなり柔らかいイネ科の羊草サーイを使っていた。

小屋組は素朴で、梁カメポーをわたし、東立にして棟木ヨーンマルを承ける。トラスのような斜材を入れて補強したものもある。オンドルは溶岩でつくる。煙道を確保しながら東石をたて、その上にオンドルの床下地となる板石クードウルドウルをならべ、すき混じり土で隙間をふさぎつつ水平面をつくり、セメントで化粧する。これに板やビニールシートを敷いてすわる。

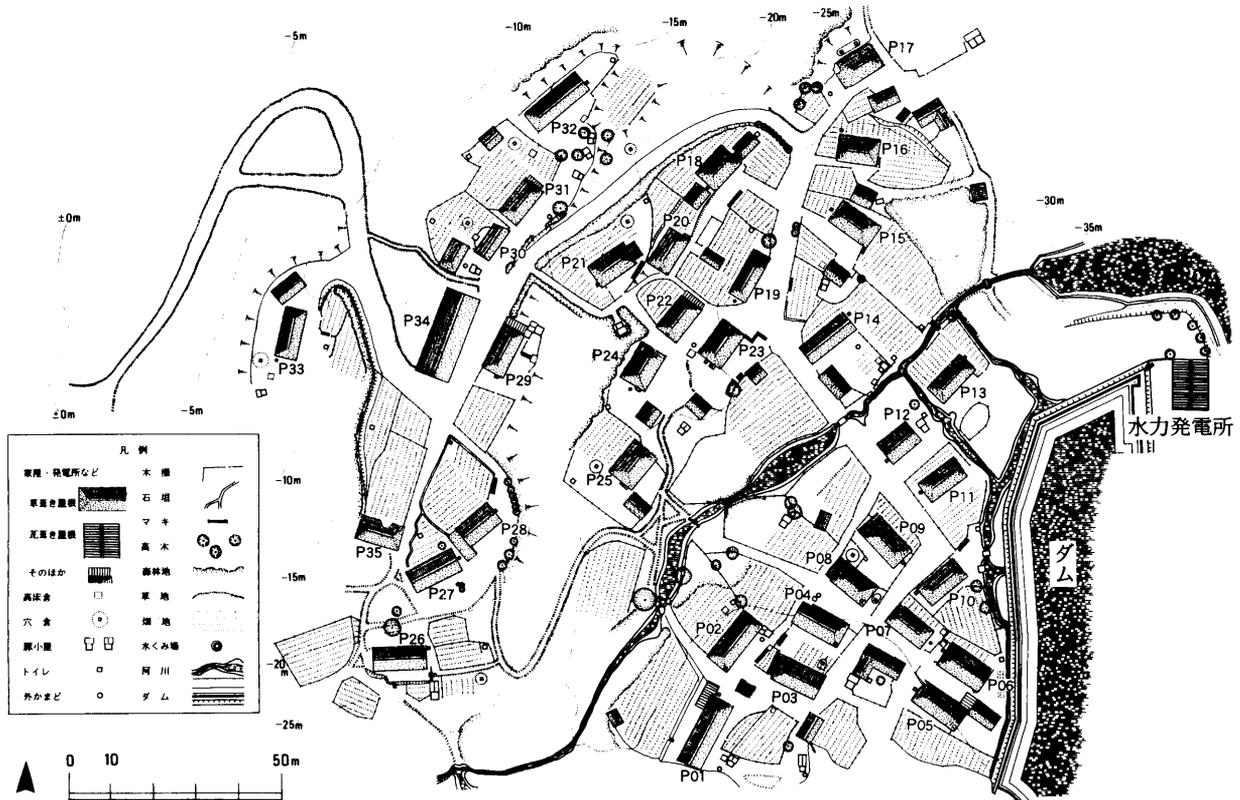


図3-10 二道村集落配置図 1:1800



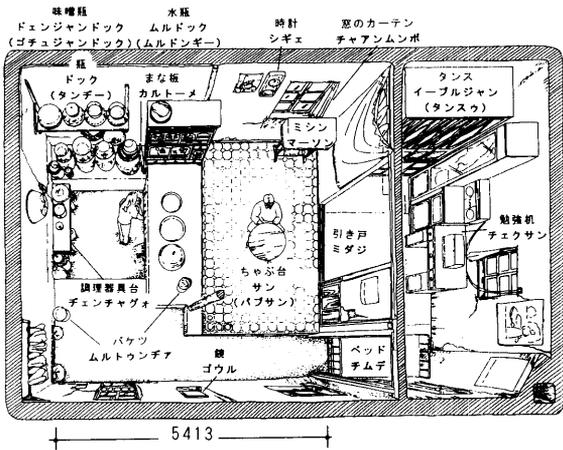


図3-13 二道村・朝鮮族P08  
主屋内部パース (床面レベルで1:150)

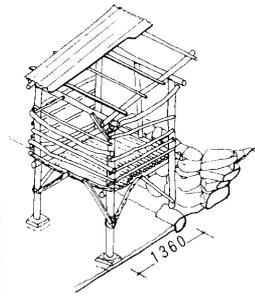


図3-14 二道村・朝鮮族P08  
付属の高床倉庫ダラク

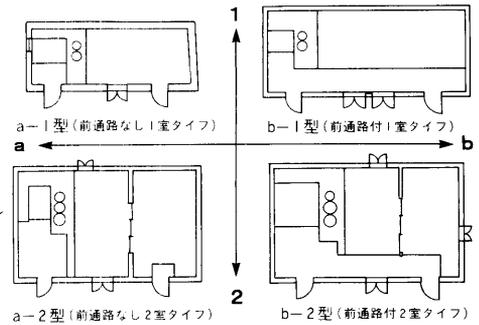


図3-15 二道村・朝鮮族住居平面の細分類

部との系譜関係を想定してよいだろう。

⑥ 竪穴住居から発展した朝鮮族の民家は、まず**ブロック**と**オンドル**が一体化した1室型平面(a-1型)から出発したものと推定される。じっさい、土幕民とよばれる人びとの半地下住居にはこの1室型があり<sup>注13)</sup>、瀑布村の移民も初期はこの種の竪穴住居に住んでいたという。現在の瀑布村住居は、この原初的平面に**ウバン**を加えた2室型であるが、1室型も現存しており、いずれも朝鮮族住居の祖型にちかい平面を示している。要するに、たんなる地域性を越えた朝鮮族住居発展段階の初期状態をとどめる例として位置づけることが可能かもしれない。

#### 4.3 考古資料と調査データの比較

⑦ 炕が現代のような床暖房装置になるのは、渤海時代以降のことである。それにともない、黒龍江流域では竪穴住居から竈・炕付き平地住居への移行が起こる。それ以前の祖形炕が竪穴住居にとりこまれたように、一部では、現代的な炕がひきつづき竪穴住居に残ったと考えられる。

⑧ ただし、考古資料では、女真以降の竪穴住居はよくわからず、19世紀の民族誌記録まで空白期が存在する。一方、民族誌自体に竪穴住居に関する詳しいデータがなかったわけだから、今回の資料は、その間のミッシング・リンクを埋める貴重な資料といえるだろう。

⑨ 老山頭遺跡のようなテント状遺構は、オロチョン族の村で調査した「仙人柱」が参考になる。とくに、「仙人柱」が地中に穴を掘らずに柱をたてる点は、考古学調査で遺構が発見できない遺跡の再検討をせまるデータといえる。また、夏はテント内に炕を設けず外に設置し、冬は中に設置するという習性も、考古遺跡をみる上で参考に値するものであろう。(浅川・大貫)

#### <注>

1) 池上二良「ツングース諸語」『言語学大辞典』第2巻:pp.1058~1083,三省堂,1989

- 2) 梅田博之「朝鮮語」(注 前掲書: pp.950~980)
- 3) 浅川「正史東夷伝にみえる住まいの素描」『文化財論叢』Ⅱ: pp.795~819,同朋舎,1995。このほか、ツングース系諸族の住居に関する研究史を紹介すべきだろうが、紙数との関係もあり、本稿では省略する。
- 4) Диков, Н. Н. Дрхеологические памятники Камчатки, Чукотки и Верхней Колымы, Москва, 1977。以下の考古学的記述全般にわたって、Деревянко, Е. И., Племена Приамурья (Новосибирск, 1981)も参照した。
- 5) Окладников А. П. Древнее поселение Кондон, 1983
- 6) 都出比呂志「竪穴住居の平面形」『日本農耕社会の成立過程』: pp.114~141, 岩波書店, 1989
- 7) Деревянко, А. П. Ранний железный век Приамурья, Новосибирск, 1973
- 8) Деревянко, Е. И. Мохэские памятники Среднего Амура, Новосибирск, 1975
- 9) 黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系「黒龍江海林市河口市遺址発掘簡報」『考古』1996年2期。
- 10) 趙善桐「黒龍江濱県老山頭遺址発掘簡報」『考古』1962年3期。
- 11) 以下、現地で採集したツングース諸語および朝鮮語の語彙については、カタカナに下線をつけて表記する。朝鮮語については、ハングル表記も記録しているが、省略する。
- 12) 田口稔「ゴリド族の倉庫に関するメモ」『民族学研究』6巻1号: pp.44~48, 1940
- 13) 金允彦「土幕スケッチ」『朝鮮と建築』9輯10号: pp.10~14, 1930

#### <研究組織>

主査	浅川 滋男	奈良国立文化財研究所主任研究官
委員	村田 健一	奈良国立文化財研究所主任研究官
〃	大貫 静夫	東京大学文学部助教授
〃	栗原 伸司	総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程 (調査時=天津大学留学生)
〃	坂田 昌平	京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程
〃	楊 昌鳴	天津大学建築系副教授
〃	黄 任遠	黒龍江省社会科学院文学研究所副研究員

図面作成協力 (敬称略)

北野陽子・小倉依子・鎌田礼子・浦田智子・藤井佳子・甲斐英里子